

徐福渡来伝承をめぐる断章：寛輔のこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袴田, 光康 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010044

徐福渡来伝承をめぐる断章

——寛輔のこと——

袴 田 光 康

科研費の関係で徐福に関する資料を集めたのは一昨年のことであったが、今年は大学院の授業で浦島伝承を扱ったこともあり、神仙思想と徐福伝承について改めて資料を読み返す機会が多くなった。その中で一人の渡海僧の存在が気になり出した。消息不明の彼こそが、蓬萊を目指した徐福が実は日本の富士山に辿りついていたという徐福伝承の続きを初めて宋に伝えた人物であり、その伝承が宋から日本に逆輸入された可能性が浮かんできたからである。この紙面を使って、私の「尋ね人」について聊か記すことを許していただきたい。

まずは大もととなる中国の徐福伝承についてであるが、『史記』『秦始皇帝本紀』によれば、徐福¹が秦の始皇帝（BC259～BC210年）のために不老不死の薬を求めて東方の海に漕ぎ出したのは、今から2200年も昔のこととされている。巨大な権力を握った絶対的支配者が、唯一、自身の死のみを怖れて神仙思想に溺れていくその愚かさを鋭く捉えた司馬遷（BC135～BC86年）の史官としての諷諭的筆致は認めるにしても、この寓話がどれほどの歴史的事実性を含んでいるのかは定かでない。

実際、同じ『史記』の中でも「秦始皇帝本紀」と「淮南衡山列伝」では徐福の記述が異なっている。「秦始皇帝本紀」では、大鯨魚のために蓬萊に近づくことができなかったなどと言いつけて巨万の費用だけを始皇帝から巻き上げた詐欺師として徐福は描かれている。一方、「淮南衡山列伝」では、徐福は三千人の若い男女と五穀の種と多種の職人たち（「百工」）を伴って「平原廣澤」に至り、そこに王として留まり帰って来なかったと記されている。そもそも徐福なる人物が実在したのかということ自体がわからないのだから、どちらの徐福伝承が事実に近いのかと問うてみても確かめる術はない。ただ、徐福伝承と言っ

¹ 「秦始皇本紀」では「徐市」（「市」は「市」ではなく、「巾」＋「一」で「市」である）と記されているが、ここでは「淮南衡山列伝」に記され、最も一般的に用いられている「徐福」の表記に統一する。

た場合、専ら徐福は「平原廣澤」に至り王になったという後者の伝承の方を指す向きがある。

その徐福伝承を引き継ぐ形で徐福が辿りついた東方の「平原廣澤」を日本であると説く二次的な徐福渡来伝承も形成されている。ネット上で検索をすると、鹿児島いちき串木野市、同県出水市、宮崎県延岡市、佐賀県佐賀市、福岡県八女市、岡山県倉敷市、京都府伊根町、和歌山県新宮市、三重県熊野市、山梨県富士吉田市、神奈川県藤沢市、東京都八丈島、青森県小泊など、鹿児島から青森まで日本中の至る所に徐福の上陸地もしくは徐福ゆかりの地が認められる。これでは徐福が何人いても足りないだろう。

もっとも、徐福伝承は日本国内だけに限られたものではなく、韓国の済州島や慶尚南道の南海島にも徐福が立ち寄ったという伝承がある。中国でも江蘇省連雲港市贛榆県金山鎮の徐阜（徐福村）をはじめ、山東省膠南市琅琊や河北省滄州市千童鎮や同省秦皇島など徐福ゆかりの伝承地は多い。中国沿岸部から韓国南岸を経て日本各地に分布する現象は、まさに中国から日本に帰国する遣唐船の航海ルートに沿う形で東アジア的広がりを見せていると言える。

ただし、徐福の事実化は負の側面をも帯びている。近年のテーマパーク化した「始皇求仙入海処」（秦皇島）や数多い徐福関連のイベントには観光開発やビジネスの匂いが強く漂う。そうした徐福を観光に利用したコンテンツ文学の展開の中では徐福伝承は既に自明の事実と化してさえいる。それほどではないにしても、日本の徐福愛好家たちも学会や研究会を開き、各地に伝わる徐福渡来伝承を史実化することに熱心である。また、江戸末期以降に書かれた『富士文書』（宮下家文書）に依拠しながら、まことしやかに徐福とその子孫たちが熊野や富士山に定住したという超古代史を説く出版物も少なくない。更には、好事家らによる大量のネット情報が、便利な反面、徐福伝承を歴史化する妄想に拍車をかける一面を持っている。東アジアを包むような一種の熱気のようなものを帯びながら、徐福伝承と徐福渡来伝承は歴史化という形で一部の愛好者によって今もなお新たに語り継がれているのである。

解釈は自由であっていい。だがしかし、徐福伝承とその延長に語られた徐福渡来伝承が、怪しげな言説の中でひたすらに史実化され、社会に利用されていく現象を奇妙に思わずにはいられない。文学は社会や経済の役になど立たない方がいい。役に立たなくていいから、伝承は伝承として語りたい。

※

前置きが少し長くなったが、私が初めて徐福に注目したのは、富士山と蓬莱山のイメージの重なりをエッセイ風の論考²に記した時のことであった。中国五代の後周（951～960年）の顯徳元年（954）に義楚によって編まれた『義楚六帖』は、儒家が仏教用語を誤用しないようにするために『白氏六帖』に倣って部門を立てて仏教語の解説を施した仏教の案内書であるが、その中の「日本国」の項には次のように記されている³。

日本国。亦是倭国と名づく。東海の中。秦の時、徐福、五百の童男と五百の童女を将て此の国に止まる。今の人物一に長安の如し。顯徳五年、歳は戊午に在りて、日本国傳瑜伽大教弘順大師賜紫寛輔といふ有り。又云ふ。本国都城の南百餘里に金峯山有り。頂上に金剛藏王菩薩有り。第一の靈異なり。山に松檜・名花・軟草有り。大少の寺数百、節行高道の者之に居す。曾て女人の上ることを得ず。今に至りて男子上らんことを欲すれば、三月酒肉欲色を断ず。求むる所は皆遂ぐ。云く、菩薩は是、弥勒の化身、五臺の文殊の如し。又東北千餘里に山有り。富士と名づく。亦是蓬莱と名づく。其の山峻にして三面は是れ海なり。一朵上に聳え頂に火煙有り。日中に上より諸の寶有りて流れ下り、夜は即ち却り上る。常に音楽を聞く。徐福此に止まる。蓬莱と謂ふ。今に至て子孫皆秦氏と曰ふ。彼の国、古今侵奪する者無し。龍神報護す。法は人を殺さず。過を為す者は犯人島に配在す。其の他の靈境名山は一一之を記すに及ばず。（原漢文を私に訓読す）

宋の頃の日本理解を知る上でも興味深い史料であるが、ここで注目したい点は、顯徳5年（958年）に日本僧の寛輔^{かん ぽ}から直接に聞いた情報として富士山が蓬莱とも呼ばれていること、その富士山に徐福がやってきたこと、徐福の子孫たちは秦氏を名乗っていることなどが記されていることである。顯徳5年が『義楚六帖』の成立した顯徳元年よりも後であるのは不審に思われるかもしれないが、実際に『義楚六帖』が刊行されたのは20年ほど後の宋の開寶6年（973年）のことであったから、この間に追記されたものと考えれば矛盾はない。恐らく、これが徐福の日本渡来伝承の文献的な初出である。

² 拙稿「富士山とペンキ絵」（『文芸研究』126号、2015年3月）

³ 広く『義楚六帖』の書名で呼ばれているが、正しくは『釋氏六帖』である。同書の引用は、寛文九年刊の和刻本を底本とした牧田諦亮校閲・山路芳範編集『義楚六帖』巻二十一「国城州市部第四十三」四五九頁による。

例えば、都良香（834～879年）がその晩年に記した「富士山記」は山頂に天女が舞う神仙境として富士山を描くが、蓬莱にも徐福にも全く触れるところがない。成立年代は未詳ながら遅くとも10世紀前半には成立していたと見られる『竹取物語』にも富士山が神仙思想と結びつけられて描かれているが、蓬莱や徐福を語らないことは『富士山記』と同様である。強いて言えば、帝が不死の薬を焼かせるために富士山に使者を遣わしたという記述に蓬莱山に不死の薬を取りにいかせたという徐福伝承を逆転させたパロディー性を読み取ることはできるだろう。ただ、寛輔の言葉を裏付ける左証とするには心もとない。

一方、徐福については、『日本書記』の中に既に徐福を踏まえたと思われる田島守の伝承が見えるが、10世紀の『うつほ物語』や11世紀初頭の『源氏物語』にも徐福伝承を描いた白居易の「海漫漫」を引用する形で表現されており、仮名文学にまで広く浸透していたことが窺われる。その意味では、富士山が神仙境として蓬莱と同一視されていれば、広く知られた徐福伝承を手繰り寄せるのも必然であったと考えられるが、秦氏の始祖伝承と結びつくまでにはまだ間隔があると言わなければならない。

ちなみに秦氏は朝鮮半島からの渡来氏族と見られているが、百済系とも新羅系とも言われて判然としない謎の一族である。ただ、当時は『新撰姓氏録』（815年成立）に説かれているように、秦氏は秦の始皇帝の末裔で、百済から日本に渡って来た弓月君を祖とすると説が一般に広く信じられていたようである。これに対して、『義楚六帖』に記された徐福を祖とする秦氏の伝承が異説に当たることは明らかである。恐らくは、秦氏が渡来系氏族であること、加えて秦氏が養蚕、機織・土木などの様々な技術に秀でた職能集団でもあったことから、徐福に伴われた「百工」と結びつけられ、延いては徐福の末裔という異説まで生まれたものと見られるが、果たして寛輔は、富士山—蓬莱—徐福—秦氏を結びつけたこの異説をどこで聞き及んだのであろうか。

※

そもそも、寛輔とは何者であったかということが問題だが、『国史大辞典』にも『平安時代史辞典』にもその名は載っていない。極めて史料に乏しい人物である。しかし、大抵の事は必ず先人が何か言及しているもので、西岡虎之助⁴、

⁴ 西岡虎之助「奄然の入宋に就いて（第二回）」（『歴史地理』第45巻第3号、1915年3月）

木宮泰彦⁵、榎本涉⁶、王勇⁷、王麗萍⁸らの諸氏の論考によって、寛輔の経歴が凡そながらわかってきた。寛輔は、延長5年(927年)に五台山巡礼のために渡海した寛建(生没未詳)の従僧の一人であった。寛建の没後に五台山への巡礼を果たし、その後も彼の地に留まって後唐の明宗から弘順太師の号を賜り、洛陽で瑜伽大教(密教)の普及に貢献した人物のようである。

成尋(1011～1081年)の『参天台五台山記』巻六の熙寧6年(1073年)2月15日条には、三蔵から送られてきた『諸教壇図』一卷を紐解いた成尋が、その中の『金剛界諸尊別壇図』の奥書に「于時長興三年四月内、於洛京敬愛寺内写得畢。日本国持念弘順大師賜紫寛補記之」とあるのを発見したことが記されている⁹。言うまでもないが、ここに「寛補」と表記された人物は寛輔のことに他ならない。長興3年(932年)と言え、成尋がそれを見た時から140年も前のことであるが、その頃、寛輔は洛陽にいたことが知られる。140年も前に日本から渡って来た先輩僧が異国で書写した『金剛界諸尊別壇図』を手にした成尋は、さぞや心動かされたに違いない。同日条の後文に次のように記している。

寛補は、是れ朱雀院の御時、寛建・超會等十一人と與に唐國に來たる人也。瑜伽大教(ママ)大教を大唐に興す。寛補より謹順を受くる人三十余人と云ふ。裔然法橋が日記に超會大師の語る所に依りて記す也。(原漢文を私に訓読す)

これは裔然(938～1016年)の『在唐記』から寛輔に関する記述をわざわざ成尋が引用して記したものである。裔然が983年から986年まで宋に滞在していた期間に記された『在唐記』は散逸してしまったが、『鷲珠抄』巻六の「裔然法橋在唐所本朝大德数十人事」に裔然が洛陽で超會という日本の老僧に逢った時のことが記されている。85歳になる超會は、寛建や寛輔らと共に大陸に渡って来た一行の生き残り、彼ら一行のその後の消息を裔然に語った。寛建は五台山に赴く前に早く建州で亡くなり、一行は長興年間(930～933年)に汴京(開封)に入った後に五台山をはじめとする聖地を巡礼したが、その後、漢語を学び唯

⁵ 木宮泰彦『日華文化交流史』(富山房、1955年)

⁶ 榎本涉『僧侶と海商の東シナ海』(講談社、2010年)

⁷ 王勇「道賢をめぐる人間関係を中心として」(『アジア遊学』No.22、2000年12月)。同論では寛輔は五台山に奉納された道賢上人経筒の奉納者と見られている。

⁸ 王麗萍「入華僧寛輔に関する二三の史料」(『アジア遊学』No.22、2000年12月)

⁹ 『史籍集覧』第26冊「新加別記類」第三(近藤活版所、1902年)所収『参天台五臺山記』巻六768頁。以下、引用は同書による。

識を講じていた澄覺は帰国のため兩浙に去り、密教を広めて弟子を三十人も輩出した寛輔は数年前に逝去したと、日本語をすっかり忘れてしまった超會は、筆談で喬然に伝えたのであった。それを記した『在唐記』の記事を、偶然に奥書に「寛輔」の名を発見した成尋は真っ先に思い出し、自らの日記に書き留めたのである。寛輔をはじめとして望郷の念を抱きながら人知れず異国の地に骨を埋めた幾多の渡海僧たちの孤独と悲嘆が、自ずと喬然や成尋らの胸にもひしひしと迫ってきたことであろう。

※

これまで知り得た寛輔の履歴を年表風に整理すると、以下のようになろうか。

- 927年 寛建の従僧として宋に渡る。
- 930～931年 汴京に入る、五台山等を巡礼、この頃に弘順大師号を賜う。
- 932年 洛陽にて『金剛界諸尊別壇図』を書写する。
- 958年 義楚に金峯山・富士山などについて語る。
- 973年 『義楚六帖』刊行。
- 980年頃 入寂か。

この没年は超會の「逝去之後数年」という言葉に依拠したものであるから正確ではないが、凡そ50年に及ぶ在宋生活であったと見て大過あるまい。比較的恵まれた立場にあって、その宗教活動も高く評価されたようだが、異邦人としての苦勞は絶えることがなかったであろう。なお、955年には後周の世宗による仏教弾圧があったから、その影響も受けたかもしれない。ただ、滞在期間が多年に渡ることや密教を教えていることからすると、言葉の障壁はある程度のり越えられたものと考えられる。宋に渡って30年も経た時点でなされた義楚とのやり取りも筆談や通事を通したのではなく、寛輔自身が直に中国語で対談したものと見ていいだろう。それは、二人の間で言葉の概念や翻訳上の問題で誤解が生じる可能性が極めて低かったことを意味する。

ここで改めて『義楚六帖』に記された寛輔の言葉を振り返るならば、寛輔の語り口は、金峯山は五台山に、富士山は蓬萊山に、それぞれ比肩するような形で語られている点に特徴が認められる。そこには日本が中国に決して劣らない聖地であるという自国意識が潜在しているように思われる。それは、人も物も

全く長安と同じであると言い、また神仏に守護されて一度も他国からの侵略を受けたことがないと述べているところなどにも窺われる。渡海して30年、既に帰国の望みも断念したであろう寛輔には、却って望郷や愛国の念が強く作用した可能性もあるし、日本人として異国で生き抜いてきたプライドもあったであろう。そうした寛輔の境遇と心理を背景に考えるならば、日本について語りを求められた時、彼が過剰なまでに日本の神聖さを強調し、中国と肩を並べようとしたことも理解できるような気がする。

注意深く読めば、金峯山に関する情報は詳細であるばかりでなく、極めて正確であるのに対して、富士山に関する情報は曖昧で不確かであることに誰もが気づくであろう。彼が密教僧であることからすれば、金峯山の信仰や修行に精通していたことは当然であろう。それに比べて蓬萊になぞらえられた富士山については情報が少なかったのではなかろうか。そこに導入されたのが徐福と秦氏である。秦から人と物と技を渡海させた「徐福」という始祖のコードも、中国の源流である秦を想起させる「秦氏」という子孫のコードも、日本を中国と同様の高度な国家として持ちあげるには効果的であった。

とは言え、ここで言いたいのは、寛輔が独自に徐福渡来伝承を創作したということではない。表現として確認はできないが、蓬萊と同一視された富士山が徐福と結びつく可能性が極めて高かったことは前述した通りである。また、山城を本拠地とする秦氏であるが、『日本書紀』には秦河勝が富士川の常世虫騒動を一掃したことが記されており、富士山周辺と秦氏にも何らかの関係があったと考えられる。その意味では、富士山に住んだ徐福の子孫が秦氏であるという異説が秘かに存在した可能性も否定はできない。むしろ、そのような異説を代表的な定説であるかのように義楚に紹介した者こそが、寛輔であると考えたい。

ただ、寛輔の渡海以前はもちろんのこと、平安・鎌倉時代を通じて富士山—徐福—秦氏を結びつけた言説は見出すことができないことも看過できない。1366年成立の『詞林采葉抄』に「或記云此山ハ蓬萊也。昔漢朝ノ方士此山ニ来テ求メ不死薬ニ矣」とある記述が、国内では最も早い徐福渡来伝承に関する記述である。約400年間も国内では文献的に徐福渡来伝承が確認されない一方で、東福寺蔵の現存最古の宋刊本『義楚六帖』が仁治2年（1241年）に駿河出身の聖一国師によって招来されていることは注目される。即ち、この頃に『義楚六帖』が盛んに日本に持ち込まれたとするならば、寛輔が義楚に語った徐福渡来伝承は逆輸入される形で13世紀以降に日本に浸透していったのではないだろうか。それが漸く14世紀になって一般化し、『詞林采葉抄』の富士山の注釈に現れること

になったのであろう。この見通しを確かめるためには、なお丹念に400年間の富士山や秦氏に関する資料を辿る必要があるが、この続きはまた別の機会に譲ることにしよう。

※本稿は科学研究費助成事業（基盤（C））東アジアにおける徐福東渡伝承の形成と受容に関する研究（研究代表者：金任仲、課題番号：26370215）の成果の一端である。